

おばあさんの村

中野重治作



岩波少年文庫 2058

中野重治作

おばあさんの村

岩波少年文庫 2058 昭32

188p. さし絵 37 18cm 小学上級以上

913

おばあさんの村

岩波少年文庫 2058

昭和32年11月11日 第1刷発行 ©

昭和49年11月15日 第10刷発行

¥ 400

作 者 なか の しげ はし
中 野 重 治

東京都千代田区一ツ橋 2-5-5

発行者 岩 波 雄 二 郎

長野市中御所 2-30

印刷者 田 中 忠



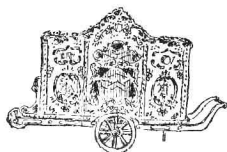
発 行 所 東京都千代田区 一ツ橋 2-5-5 株式会社 岩 波 書 店

落丁本・乱丁本はお取替いたします

大日本法令 印刷・製本

おばあさんの村

中 野 重 治 作



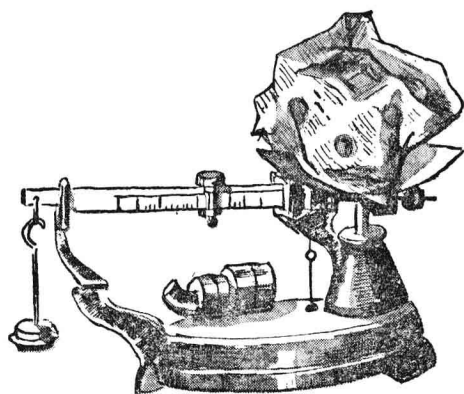
岩波少年文庫 2058

目次

おじさんの話	五
きかん車 ^{しゃ}	五
キクの花	三
ちょうつがい	七
ヤナギのたなばた	七
地震 ^{じしん} のはなし	三
おばあさんの村	一三
子どものための、少年少女のための文学について	一六
読者のみなさんに	一八五

口絵・さし絵 前島^{まえじま}とも

お
じ
さ
ん
の
話



・m

六郎は八百屋のむすこで、名まえは六郎だけれども長男である。下に善二という弟と、まだ小さい妹がふたりとある。

ほかの家の長男は、たいてい一雄とか太郎とかいう名で、そうでないときもあるが六郎というのではない。それであるとき、六郎はおとうさんにきいた。

「とうさん、あたいはどうして六郎なんだい？　一郎じゃなくさ……」
するとおとうさんが答えた。

「おじいさんがそうつけたんだよ。」

しかし六郎は、おじいさんを知らない。六郎のおじいさんは、六郎がまだ赤ん坊のうちに死んでしまった。だから、おじいさんがなぜ六郎とつけたのか、きくわけにはいかない。おじいさんがどんな顔をしていたか、六郎はおぼえてもない。

「じゃ、善二はとうさんがつけたの？」

「そうだ。」

そのおとうさんは、朝はやく市場へ出かける。山のように野菜を積んでかえる。朝から夜

までお客が買いにくる。学校からかえって、六郎はそれを手つたう。

「皮つき？ ありますよ……六銭です。」

そういつて六郎は、皮つきイモの袋をはかり皿にのせる。はかり皿のほうさがり気味になる。しかしかまわない。

「おまけにしますよ。」

「おや。それはありがとう。」と、奥さんが受けとる。

「あんたたちのむすこさん、ずいぶんりこうだね。」

奥さんはそういつて、六郎のことをおとうさんにほめる。

「なあに……」

おとうさんは、毛糸の腹巻きへ手をつっこんで、じゃりじゃりとお釣り銭をだしてくる。

「からきし意気地がねえんで……」

「意気地なんかあるぞ。」と、横で聞いている六郎は思う。しかしかまわない。六郎は発明のことを考える。せんから考えている発明……それができあがったら、どんなにおかあさん

に便利だろ^{べんり}う。おかあさんにも便利だし、町全体^{まちぜんたい}のガスも儉約^{けんやく}になる。みんなが得^{とく}をするのだ。

もと六郎の家は、村^{むら}のほうにあった。六郎のおとうさんは、百姓^{ひやくしやう}をしていた。それが、六郎が九つ^{ここのえ}のとき、村をやめて町^{まち}へ出てきた。そして八百屋^{ややおや}をはじめた。八百屋だから、このごろになるとトウモロコシが出る。六郎は、店^{みせ}を焼^やいてたべてみたけれどもうまくない。夕方になると、横橋^{よこばし}のところへもトウモロコシ屋が出る。屋台^{やたい}へトウモロコシを積^つんできて、醬油^{しょうゆ}をつけて七輪^{しちりん}で焼いて食^くわせる。六郎は、それもたべてみたけれどもやはりうまくない。

「ああ、村のトウキビはうまかったなあ……」と、六郎は思^{おも}いだす。

村と町とは二十里^{にじり}しか離^{はな}れていない。しかし村と町とはひどくことばがちがう。町ではトウモロコシという。村ではトウキビといった。品^{しな}は同じでも、トウキビはうまかった。

六郎は朝早くはね起きる。目をこすりこすり、はだかのまま畑^{はたけ}へかけつける。背^せの高いトウキビの木が、三列^{さんれつ}に並^{なら}んでいる。茶^{ちや}いろの毛^けが垂^たれている。六郎は背^せのびをして、皮^{かわ}の上からさわってみるか、爪^{つめ}で皮をすこし剥^はいでしらべてみるかして、これぞと思うのを力^{ちから}一ぱ



いぐいと下へ引く。

こ、きゅう……

向こうにはお月さまが残っている。お月さまは白くうすぼけている。足にさわってホウセンカの果がはじける。あのトウキビはほんとにうまかった。

そのころの六郎は、ひょうきん者でとおっていた。仲間切つての人氣もので、おとなたちにもかわいがられていた。

町ではうなじのことを首とか首すじとかいう。村ではそれを「おなじ」といった。また村では、「運がいい」ことを「おなじがいい」といった。「しあわせ者」は「おなじよし」だった。「運がわるい」のは「おなじが悪い」のだった。

ある日のこと、釣竿をさげた村の男の子が三人、川門の敷石の上で、のめりこみそうになつて首を洗っていた。

そこへおとなが通りかかつて、驚いて子どもにきいた。

「おまえら、何をしてるんじやい？」

しかし三人の子どもは、黙^{だま}ったままやはり洗^{あら}っていた。おとなは心配^{しんぱい}になり、それから腹^{はら}が立^たってきた。それでおとなは、こんどは大きな声でどなった。

「こら、わつら。ものを問^とうてるに黙^もってるつちゆう法^{ほう}があるかい？」

「おんさん……」と、三人のひとりが答えた、「うららあ、フナ釣^つりに行くんじやあ。おなじが悪いと釣^つれんじやろう？ おなじを、ようするんじやあ。」

こうして、フナ釣^つりに行く子どもたちは、川の上^{かみ}や下^{しも}へ出^でかけるまえに必ず首を洗った。

「だれがさ、あんなことをいいだしたんやら？」と、おとなたちがいった。

「おおかた、また六郎じやろう……」

そのとおり、それは六郎だった。ある日六郎がいいだして、みんなが喜んでまねをしたのだった。やがてしまいには、隣^{となり}村^{むら}の子どもたちまで首を洗うようになった。

村には高本^{たかもと}という地主^{じぬし}があつた。高本には男の子が四人いて、下から二ばん目の子は六郎と同年だった。しかし高本の家では、どの子も村の学校^{がっこう}へはださなかった。学校へあがる

ようになると、高本たかもとの子はみな町の学校がっこうへ行った。これは、六郎のおとうさんが越こしてきた町ではなく、村のすぐ近所きんじよの小町だった。土曜日どようびになると、高本の子はおとなの供ともを連れてかえってきた。だから高本の子は、村の子どもとはあまり遊あそばなかった。たまに遊んでいると、女中頭じよちゆうがしらのきれいなおばあさんが呼びにきた。高本の子はさびしそうに連れてかえられた。そのうち、高本の家へ、町の子どもが遊びにくるようになった。三人も五人もくることもあったが、そのうちのふたりはいつも必ずきた。日曜の朝きて、晩ばんかえることもあり、土曜日に高本の子といっしょにきて、とまって、日曜の晩またいっしょにかえることもあった。高本の子はぜったいに村の子と遊ばなくなった。

ふたりの町の子は利吉りきちというのと駒吉こまきちというのとだった。利吉は美しい顔かおをしていた。利吉と駒吉とは村の子どもから憎にくまれるようになった。

ある日、利吉と駒吉とが町のほうへかえって行くと、途中とちゆうで出あった五、六人の村の子どもが、声をそろえてこういってどなった。

「利吉や力りきんだら、駒吉や転ころんだ。」

「利吉や力んだら、駒吉や軫んだあ……」

この歌をつくったのが、やはり六郎だった。

夏になると、村ではたくさんセミが鳴いた。それを子どもたちは小ゼミ、大ゼミ、みんな、油ゼミなどとかってに分類した。そのほかに「つくつく法師」がいたが、これは「かたきんようし」と呼ばれた。

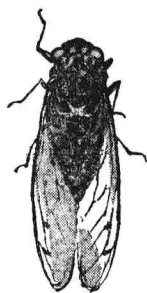
「つくつく法師」ならばこういつて鳴くはずだった——つくつく法師、つくつく法師、つくつく法師、じい、じい……

しかし「かたきんようし」はこういつて鳴くのだった——かたきんようし、かたきんようし、かたきんようし、みいん、みいん……

村に喜平さんという年寄りの百姓がいた。喜平さんは大ふぐりをしていた。夏になると、大きなふくべのようなのが下帯からはみだしていた。これは百ひろがさがるためだったが、両方のふぐりへさがるのはめったになく、たいていはどっちか片方へさがってそっちがふくれるのだった。そしてこういう大ふぐりは片きんと呼べた。だから喜平さんは大きな片き

んだった。

するといつのまにか、こういう話が村へひろまった。



「喜平^{きへい}さんが山へ行った。だんだん行くとセミ^なが鳴いて
いる。みいん、みいん、みいん……そのうち『かたきんよ
うし』が鳴きだした。『かたきんようし』は喜平さんの前へ
きて鳴いた。」

『かたきんようし。かたきんようし。かたきんようし。』

そこで喜平^{おこ}さんが怒^{おこ}って『かたきんようし』にきいた。

『われや、見たんかえ？』

すると『かたきんようし』は『みいん、みいん、みいん。』といって逃^にげて行った。」

これも六郎がつくりだした話だった。そのとき六郎は九つだった。その年の暮^くれに六郎の
家は町^ちへ越^こしてきた。

町へ出てくると何もかも変^{かわ}ってしまった。

山もなければ川もない。フナつりにもクリ拾いにも行けない。そして善三のほかに妹が生まれた。六郎のことばもすっかり町のことばになった。六郎は十二になった。友だちもできた。しかし一ばんいい友だちは六郎のおじさんだった。六郎は、友だちとはあまり遊ばずにしょっちゅうおじさんの家へいった。友だちはたいい上の学校へ行くので、上の学校へ行かぬ六郎よりはよけいに勉強しなければならず、六郎と仲がよくても、六郎と遊ぶには時間がなかった。

このおじさんは会社に出ていた。おばさんとふたりきりで、子どもも赤ん坊もいなかった。六郎は、こんなおじさんのあることを、村にいたときは知らなかった。町へきてから、あくる年の正月に、おとうさんが六郎を連れて行つてはじめて見たのだった。

「おじさんというのは親の兄弟のことだ。六郎の親はおとうさんにかあさんだ。おじさんはおとうさんの兄弟なんだろうか？ かあさんの兄弟なんだろうか？ 兄弟といっても、にいさんあれば弟もある。おじさんはどっちなんだろう？」

六郎がおじさんを知って、最初に考えた考えがこれだった。六郎はおとうさんにきいた。